

# 五感の動詞の意味拡張—感覚モダリティによる身体性と脱身体化の観点から

たかしま ゆふこ  
高嶋 由布子

京都大学大学院 人間環境学研究所 / 日本学術振興会 takashima@hi.h.kyoto-u.ac.jp

## 1.はじめに

認知言語学は、言語が我々人間の身体と環境との相互作用に動機付けられて発展してきた伝達の手段であるという言語観に基づいている。このとき、環境すなわち外部世界と我々人間は、知覚という接点を通じて情報をやり取りしている。

そこで本稿では、認知言語学の観点から、知覚を表現する五感の動詞の意味拡張について観察する。ここでは各感覚モダリティごとの身体的な特徴とその身体性の漂白化という観点から分析を行う。各々の感覚モダリティのどのような特徴が言語上にコード化され、意味拡張に反映しているのか考察する。

結果として、イベントの隣接性によるメトニミーと、各々の感覚モダリティ上の情報から概念情報への拡張があることを示す。後者は身体性の漂白化(脱身体化)によるメトニミー的メタファーからの拡張といえる。

## 2. 五感の動詞と思考への拡張

日本語の知覚動詞は寺村(1982)小泉(1989)小出(2006)を参考にまとめると次のようになる。

	他動詞	自動詞	複合表現
視覚	見る	見える	—
聴覚	聞く	聞こえる	音がする
嗅覚	嗅ぐ	匂う	匂いがする
味覚	味わう	—	味がする
触覚	触れる/触る	感じる	感じがする

日本語では、嗅覚、味覚、触覚の他動詞のプロトタイプ的な意味(知覚の意味)は基本的に知覚の成立を意味せず、知覚するときの様態のみを表している。故に自動詞化しない(高嶋 2008)。これは物理的ドメインでの意味がコードされていることを示す。

概念メタファー理論において、Sweetser(1990)は Seeing Is Touching と Knowing Is Seeing という2つのメタファーを挙げている。Touch という物理的領域での身体運動から、知覚へのメタファー写像があり、さらに Seeing という知覚行為から Knowing という概念領域への写像がある。また、Understanding Is Grasping など物理空間領域から概念領域への写像もあることが知られている。

Lakoff(1993)では、知覚行為において、知覚者は経験者格を取り、対象に力を及ぼすことがない。知覚行為は、Perception Is Contact Between Perceiver and Perceived という概念メタファーで解釈されるとし、それには二つの側面があるとしている。

(A) Perception Is Touch という概念メタファーをとって理解されるときは、図 1(A)のように能動的な行為者としての格役割を持ち、知覚行為は知覚者が手を伸ばして情報に触れようとするところから解釈される。また知覚対象から知覚者への情報の移動という解釈もでき、このとき知覚者は移動の到達点で被動作主的な意味を持って解釈されるとしている。

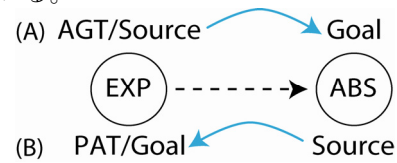


図 1

## 3. 各感覚モダリティの身体性と脱身体化

「みる」では、概念的評価のための〈検討〉と、概念的な評価を下す〈判断〉の意味がある。前者は継続相の活動動詞、後者は到達相である。

- (1) a. {医者が病状/データ} をみる 〈検討〉
- b. 医者が病状の悪化をみる 〈判断〉

知覚の意味での「見る」は「コップを見る」のように、知覚の成立までを示す。つまり、〈コップのほうに目を向けて、その物体をコップ『として』認識する〉という意味になる。この『として』という認識は、知覚者の頭の中で起こることで、外界との対応があることを除くと、「太郎が幻を見た」のようなものと同様の主観的な認識である。

しかし、「左を見る」は〈(ヲ格のほうに) 目を向ける〉のみをコードしている。「見る」は情報を得ようとする知覚的情報探索の様態だけを意味することがある。これは他者からも認識可能な〈目の動き〉であり、物理空間領域における身体運動である。

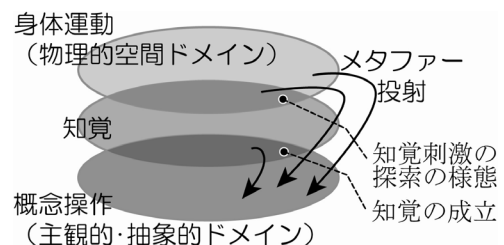


図 2

知覚行為は、他者と共有している物理的空間ドメインから、自己にしかわからない主観的な概念操作のドメインにまたがっているとモデル化できる。このとき、知覚の成立は、概念操作のドメインと主観性という点で共通点がある。逆に、知覚しようとして何かする探索の様態は、身体運動の

領域と共有する部分がある。この三つのドメインの関係から、メタファー投射を整理すると、「左を見る」のような探索の意思と様態から(1a)のような概念的意味への投射があり、知覚の成立から(1b)のような投射があると考えられる。このとき、普通の視覚モダリティにおける目による情報探索以外のことも(1)では行われているという意味で、探索する領域は視覚刺激からそれ以外のモダリティの領域へという写像が行われていると考えられる。このような写像は(2)の「嗅ぐ/匂う」でも起こる。このとき「見る」よりも〈不確かで直感的な情報〉とくに〈事件〉などを扱うのが嗅覚からのメタファーである。

- (2) a. 私立探偵が事件を嗅ぎまわる  
 b. 事件の匂いを嗅ぎ取る  
 c. あの男のそぶりが臭う

情報の受容(Lakoff(1993)の(B)の側面)からの拡張といえるものは、(3)のような〈経験する〉という意味を表すものがある。

- (3) a. {憂き/痛い} 目を見る  
 b. {酸いも甘いも/艱難辛苦を} 味わう  
 c. {多文化/英語} にふれる

また、「触れる」は「触る」より意図性が低く、受容の側面が強いが、この「触れる」は知覚よりも身体的〈接触〉の様態から直接概念操作上での接触へと意味が拡張しているといえる。(cf.道具を扱う→問題を扱う)

- (4) a. 逆鱗に触れる  
 b. 問題に触れる

#### 4. イベントの隣接性による拡張

身体的なドメインから概念操作への写像ではなく、以下はイベントの隣接性に基づいて解釈できる。すなわち、各感覚モダリティがどのような役割を果たすかということに関係している。

- (5) a. 先生に分からない点を聞く 〈質問する〉  
 b. 社長の命令を聞く 〈服従・対処〉  
 (6) a. 調律師がピアノをみる 〈評価・対処〉  
 b. かばんを見ておいてね 〈管理・対処〉  
 c. 看護婦が病人を見る 〈世話・対処〉

(5a)は、先生から分からない点を教えてもらえることを期待した行動であり、(5b)は命令を聞いたあとで理解して、やらなければならないことをするという〈対処〉である。これに並行して(6a)は、ピアノの状況を目で見て、それ以外の感覚でも確認し、状況を〈評価〉し、必要なメンテナンスを行うという〈対処〉である。このように、各感覚モダリティが担う役割に伴うありがちなイベントに基づき、その隣接したイベントを意味しているのがこの拡張である。

#### 5. 考察

Croft(1993)では、認知ドメイン間投射をメタファーと呼び、同じドメイン内での隣接性に基づくのがメトニミーとしている。4で見たイベントの隣接性に基づくメトニミーは基本的なメトニミーだが、3の概念操作へのメタファーも知覚に共起している思考・推論〈目の前のモノがなんであるか、どうしたらよいか〉に基づいているといえる。この共起が基本となっているが(2)のように、全く感覚モダリティが関係ない対象に対する思考・推論に意味拡張していく。

自己の主観的な概念操作のみが意味として残る拡張が、「聞く」では起こらない。これは他の感覚器官では、意思的に情報を探索できる側面があるのに対し、音声コミュニケーション上でなく知覚の意味で「聞く」ことが出来るのは環境任せという聴覚の身体的特徴を反映しているといえる。(音に注意するという探索的側面は「耳を澄ます」という表現になる)

また、触覚では身体的・物理的接触が知覚主体の主観的な意図性を伴わなくとも状況として成立している局面を表すことから、知覚しているという概念上の認識ではなく、接触している状態からの意味拡張が起こっている。

これらのことから、主観的な概念操作への意味拡張においては、知覚しようとする主観的で主体的な意思や思考・判断が関わっており、身体操作や具体的な対象の知覚という身体性が薄れることから意味拡張が起こっていると考察される。

#### [参考文献 (抜粋)]

- Croft, William (1993) "Case Marking and the Semantics of Mental Verbs," James Pustejovsky (ed.) *Semantics and the Lexicon*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.  
 Lakoff, George (1993) "The Metaphor System and Its Role in Grammar." *Papers from the 29th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, Chicago: Chicago Linguistic Society. pp.217-241.  
 Langacker, Ronald W. (1991). *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.  
 Langacker, Ronald W. (2002[1993]) "Deixis and subjectivity" in Frank Brisard (ed.) *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.  
 小出慶一 (2006) 「知覚動詞の語彙構造について」『群馬県立女子大学国文学研究』 25: pp. 1-16. 群馬県立女子大学国語国文学会。  
 高嶋由布子 (2008) 「知覚動詞の他動性とアスペクト—意味拡張と身体性の観点から」日本言語学会第136回大会予稿集 (印刷中)。  
 田中聡子 (1996) 「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』 110: pp. 120-142. 日本言語学会。  
 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版。  
 山梨正明 (1998) 「五感と空間認知の言語学—感性から見た言葉と意味」 *Computer Today*.83: pp. 18-27.